

厚生科学研究費補助金

障害保健福祉総合研究事業

重症心身障害児のQOL向上を支援するための衣生活に関する研究

平成12年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 多屋 淑子

平成13年(2001)年 4月

目 次

I. 総括研究報告書	1
重症心身障害児のQOL向上を支援するための衣生活に関する研究 多屋淑子	
II. 分担研究報告	13
重症心身障害児の衣類に関する研究 中村博志 〈資料〉重症心身障害児の衣類に関する研究のアンケート用紙	

厚生科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

総括研究報告書

重症心身障害児のQOL向上を支援するための衣生活に関する研究

主任研究者 多屋淑子 日本女子大学助教授

研究要旨：重症心身障害児に関する生活関連の研究は、これまでの施設中心の療育から在宅中心の療育へと変化しつつある現在、極めて重要な課題であると考え。本研究は、重症心身障害児（者）のQOLの向上を支援するために、個人の身体的そして知的機能のレベルに応じ、生活環境や活動レベルをも考慮した着心地のよい衣服情報を提供することを目的としている。今年度は、主として介護者へのアンケート調査と所持衣服の実態調査を行い、衣生活における問題点を把握した。重症心身障害児の衣生活におけるQOLの向上は、介護者の意識と密接に関わっており、特に、衣生活に対する関心は、職種により有意差がみられ、介護者の職業により、衣生活への視点は異なることが明らかとなった。また、重心者特有の身体形状が衣服の温熱的な着心地に及ぼす影響について検討した。その結果、重症心身障害児の手足末梢部の皮膚温は健常者と異なり、個人差も大きく、体温調節が不十分であることが観察され、衣服による行動性の体温調節の重要性がわかった。

分担研究者 中村博志
日本女子大学教授

このように衣食住に関する研究は、これまでの施設中心の療育から、在宅中心のものへと変化しつつある現在、極めて重要な課題と考える。

本研究では、心身ともに障害を持ち意思や感情の表現が困難な重症心身障害児にとって望ましい快適な衣服を提案することを目的とし、今年度は、衣生活における問題点を把握するために、主として、アンケート調査と所持衣服の実態調査を行なった。

1. はじめに

近年、障害を持つ人たちのQOLの向上を支援するため、様々な試みがなされている。衣服に関しては従来から、着脱が簡便でファッション性の豊かな障害児（者）用衣服の研究が進められてきたが、その多くは身体機能にのみ障害を持つ人を対象とし、本人が脱ぎ着しやすい、あるいは介護者が脱ぎ着させやすい、といった着脱動作を主に検討したものが多くである。

重症心身障害児に関する研究は、初期における療育内容に関する研究から、その後はもっと幅を広げた研究に変わりつつある。しかし、食事や衣類など身近なテーマに関しては、まだまだ、少ない現状にある。

2. 重症心身障害児の衣生活における介護者の意識調査

重症心身障害児とは、児童福祉法によれば“重度の精神遅滞および重度の肢体不自由が重複している児童”と定義されている。障害がきわめて重いため、家庭での療育は困難であり、施設での医療及

び介護が必要とされている。施設体系として成人版はなく、児・者一貫政策がとられているため、年齢に関わらず“重症心身障害児”と呼ばれている。重症心身障害児施設への入所対象者選定基準として汎用されている“大島の分類”において（図1）、重症心身障害児は区分1～4に該当し、IQは35以下、発達年齢1才半以下に相当する。身体運動能力は寝たきりまたは若干座位可能という程度であり、生涯にわたって医療と介護を継続的に必要とする。従って、重症心身障害児の衣生活の質の向上を願う上で、先ず第一に介護者の意識を把握する必要があり、本研究では重症心身障害児の衣生活に対する介護者の意識について検討を行った。

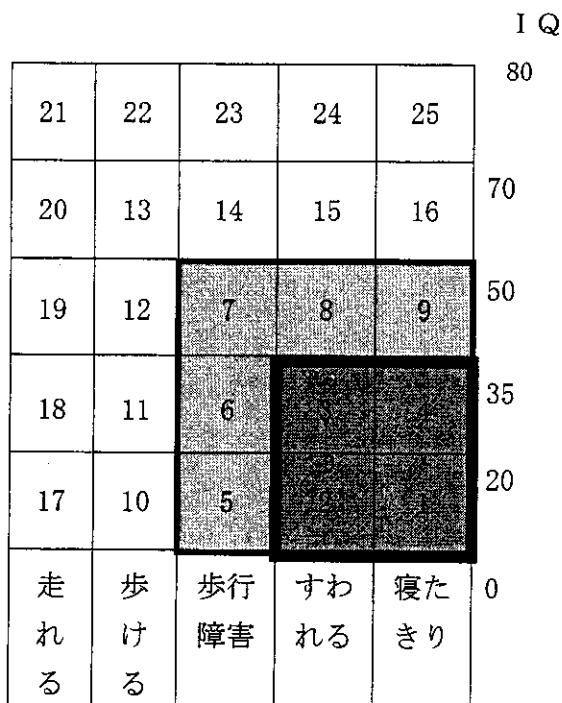


図1 大島の分類
 (大島一良, 重症心身障害の基本的問題, 公衆衛生, 35, 648-655, 1971)

2. 1 アンケート調査内容および対象者

2.1.1. 衣生活への意識調査

これは、分担研究に詳細に記しているが、衣服がどのような意識で受け止められているかという視点で、アンケート調査を行った。

「重症児を守る会東京都支部」の協力により、保護者に上記アンケートを実施した。アンケート(資料1)は、障害児に関する事項と家庭環境の事について聞き、次に保護者自身の事について聞き、最後に、衣生活について聞いたものである。

その結果、衣服には、機能性はもちろんのこと、快適性が望まれており、保温性や肌触りが重視され、サイズの不適合が問題点として抽出された。

2.1.2. 介護者の意識調査

介護者の意識調査にあたっては、平成3年に中村らが行った、全国の重症心身障害児病棟を有する国立療養所病棟施設職員へのアンケート結果を使用した。対象者は保母267名、児童指導員68名、総婦長47名、看護婦430名である。このアンケートは、重症心身障害児病棟に勤務する施設職員が毎日の仕事に対して定期的に我が身を振り返ってみることを目的として作成された自己評価チェックリスト作成のための調査であり、衣類、入浴、排泄、遊びといった17項目について、施設入所者に対して“してあげたいこと”、“してはいけないと思うこと”などの関心事について書かせたものである。

本研究では、この調査結果から衣類に関する回答の代表的な項目をまとめて集計を行い、データを解析した。

2. 2 アンケート調査結果および考察

調査結果の一部を表1に示す。左から通し番号、施設番号、職員の職種を表している。

表1 アンケート調査結果

通し番号	施設番号	職種	回答
1	327	3	衣類の汚れに気を配り、汚れたらすぐ取り替えている。
2	327	3	機能的で、洗濯に耐えるものを着せているが、色や形は患者にあったものを着せるようにしている。(要求のできる患者には希望にそったものを用意している。)
3	327	3	季節に応じた衣類を時期を決め衣替えしている。
4	327	3	外出用をできるだけ用意できるように、家族とも相談して準備している。(年齢に応じた患者にあったもの)
5	327	3	皮膚への刺激・危険性を配慮している。
6	327	3	機能性にのみ配慮したものを着せてはいけない。
7	327	3	患者の希望を無視する。
8	327	3	汚れたままにしておく。
9	327	3	状況に応じた衣服の工夫

			がなされていない。
10	327	6	汚れたらすぐ取り替える。
11	327	6	患者にあったかわいい洋服を選んで着せたい。
12	327	6	理解のある患者は服装も生活の中の一つの楽しみなので、なるべく個人の個性を尊重した(色・柄・デザイン・素材など)
13	327	6	年頃の女子はどうしても臀部が出てしまうので、臀部が充分に入る特注のズボンがあればよいと思う。
14	327	6	衣類の目立つところに名前をかかない。
15	327	6	小さすぎる衣類・大きすぎる衣類を無神経に着せない。
16	327	6	家族が持参した衣類に”けち”をつけない。(特に患者本人の前で)
17	327	6	私物の衣類を他の患者に着せないようにする。
18	327	6	流涎や便・尿で衣類が汚れていてもそのままにしている。
19	217	3	児に似合う服を着せてやりたい。
20	217	3	常に清潔な衣類を着せてやりたい。
21	217	3	寝るときはパジャマに取り替えてやりたい。
22	217	3	寒暖の差によって衣類を調整する。

23	217	3	汚染のあるものをそのまま放置しておくこと。
24	217	3	穴のあいた服を着せること。
25	217	3	身体のサイズにあわないものを着せること。
26	217	6	男の子・女の子らしい服を着用させる。
27	217	6	汚れたら着替えをさせる。
28	217	6	子供にあったゆとりのある服を着せる。
29	236	3	よだれ汚染のある衣類はその都度取り替える。
30	236	3	清潔感ある、こざっぱりした服装をさせたい。
31	236	3	汚染が目立つ衣類をそのまま着せておく。
32	236	4	サイズのあったもの、また、色彩感・季節感のあるものを着用させる。
33	236	4	不潔な衣類は絶対着用させない。
34	228	3	汚れた都度すぐ取り替えている。
35	228	3	各シーズンにあった衣類の着用・行事の服装など担当者を割り当てて、発注・数など常に管理している。
36	228	3	安易につなぎ服で困ってしまわず子供の状況にあわせて着用させるように。

37	228	3	男女の区別のある衣服を着せてあげたい。
38	228	3	四季にあわせた衣服を着せてあげたい。
39	228	3	衣服の破れたものや汚染されていても交換もせず、いつも同じ様な衣服を着せていることはいけない。
40	228	6	破損したり、ほつれたものは着用させない。
41	228	6	子供にあったサイズのものを着用させる（デザインも）
42	228	6	季節に適合した服装（素材も考慮する）
43	228	6	汚れたり、破れたり、サイズなどのあわないまま着用させること。
44	228	6	身体を抑制するような衣類着用方法（意図的な）
45	336	3	汚れた衣類に気がついたら取り替えている。
46	336	3	季節にあった服を着用させる。
47	336	3	汚染されたものをいつまでも着せておかない。

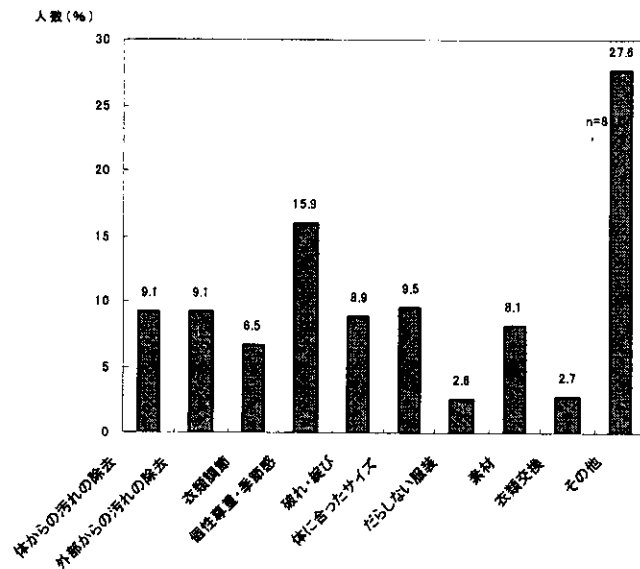


図2 施設職員の衣生活に対する関心度

表1のアンケート調査結果から、施設職員は、重症心身障害児に対し、清潔、機能性、季節感や色彩感、サイズ、子供の状況に合わせた衣服の選定、本人の希望などさまざまな答えをしていることがわかる。そこで、これらの衣類に関する回答の代表的な項目についてまとめ、集計した結果は図2に示すとおりである。図2から、重症心身障害児病棟に勤務する施設職員が、その衣生活において最も関心を示したのは、“個性を尊重し、季節を考慮した衣服を着用させること”であることがわかった。

また、施設職員の職種により、重症心身障害児の衣生活における関心の対象が異なるかどうかを検討した(図3)。

保母、児童指導員、総婦長、看護婦が、それぞれ衣服に関してどのような点に注目

しているかを検討したところ、統計処理の結果、“衣類調節”に関する項目のみ職種による有意差がみられ、職業により関心の有無が異なっていることが明らかになった。これは、重症心身障害児と接する時間帯が職種により異なること、あるいは職業意識の違いによるためではないかと思われるが、詳細については今後さらなる検討を要する。

したがって、本研究により、重症心身障害児の望ましい衣生活について提案することは、重症心身障害児の生活の質を向上させることはもちろんのこと、介護者への負担軽減にもなり、意義のあることであると考えられる。

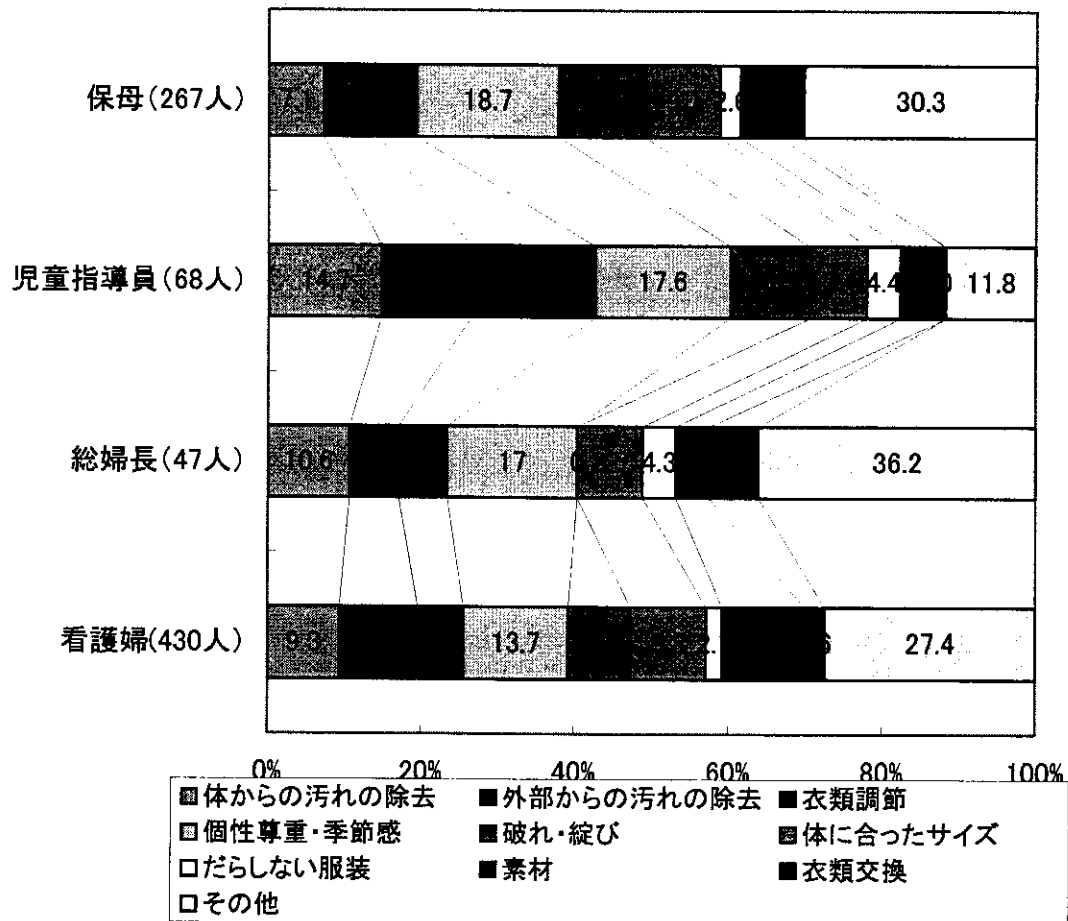


図3 衣生活に対する職種別関心度

3. 衣服調査

心身障害児総合医療療育センター内むらさき愛育園において、重症心身障害児が実際に所有している衣服の実態調査を行った。

3.1 調査内容および対象者

調査対象者は、重症心身障害児男女各3名ずつ（計6名）、および超重症心身障害児男女各3名ずつ（計6名）である。

超重症心身障害児とは、重症心身障害児の中でも特に症状が重く、絶えず

呼吸管理、栄養補給等を必要とする人達を示す。以後、重症心身障害児をⅠ群、超重症心身障害児をⅡ群と呼ぶ。

対照群として健康な女子大学生3名についても同様に調査を行った。衣服調査を実施するに際し、チェック表（例表2）を作成し、日常着、寝衣、下着の3区分において、衣服の種類、形状、素材、サイズ、開口部の形等の項目について詳細に調査した。表2は、所持衣服の実態調査を行うために着目した項目を示す。これは種々の衣服の中で上衣の例である。

表2 衣服調査チェック項目(例:上衣)

上衣	
名称 (シャツ・ブラウス, トレーナー等)	
襟の形態	(ラウンド・V・角 オープン・スタンド フラット・シャツカラー)
あき(前・後・側・肩)	
1/3・半・2/3・全	
ボタン ホック スナップ マジックテープ ファスナー	
付属品	大きさ 数 形
袖丈 (なし・半・7分・長)	
袖口のしまつ(折・ゴム・ひも・ボタン・ホック)	
裾のしまつ(折・ゴム・ひも・ボタン・ホック)	
タック (有・無)	
修繕	
素材	
色	
柄	
色落ち	
重量	
ポケット	
サイズ	
名前の位置	前・後・ウエスト・側
	表・裏
	直・当て布

なし・複数・タグ
備考 (ピリング・しみ等)

3. 2 調査結果および考察

図4に調査結果の一部を示す。重症心身障害児の所有する衣服の形状はI群II群とも健常者と変わらず、市販の既製服を改良することなく着用していることがわかった。日常着の上衣については「開きなし」が多いという傾向が得られた。これは、上衣にボタンなどがついている場合、身体が圧迫されて褥瘡の原因を生じる、あるいは衣服しゃぶりなどによって誤ってボタンを飲み込んでしまうといったことへの配慮であると思われる。介護者サイドからすれば、「開きなし」より「前開き」のほうが着脱させやすいのであるが、今回の調査対象者の場合、介護者の簡便性よりも着用者の安全性が優先されているものと思われる。

I群とII群を比較すると、所持している衣服の総数は変わらないが、日常着と寝衣の割合が異なり、II群では寝衣の占める割合が大きい傾向が得られた。調査対象施設では、生活にリズムをつけるため昼間は日常着を着用させる方針をとっていたが、II群のように全く座位は不可能、昼間も活動は見られないという場合、日常着の着用は少なくなるものと思われる。

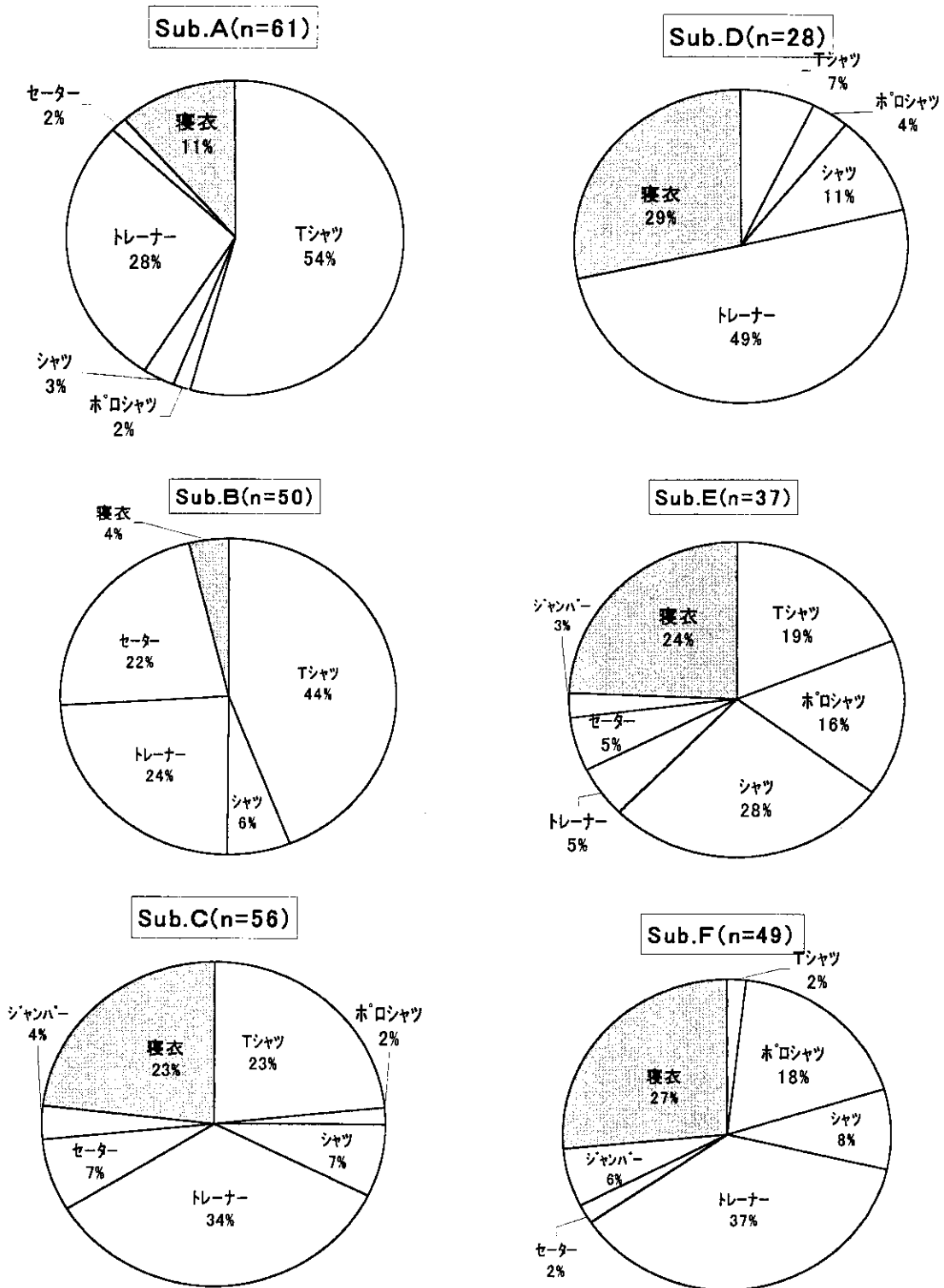


図4 所持衣服種類調査 (I群:重症心身障害児) 上衣の例
n = 調査衣服枚数

次に、重症心身障害児の身体サイズに市販の既製服がどの程度適合しているかを検討した。

表3はI群の重症心身障害児の調査対象者の一例の身体サイズを示したものである。

表4には、調査対象者の身体サイズ(例として被験者B)ならびに既製衣料品サイズ範囲表示を示す。

表3 I群調査対象者Bの身体サイズ例

年齢(才)	52
胸囲(cm)	76
胴囲(cm)	68
腰囲(cm)	78
身長(cm)	137
体重(kg)	29.8

表3の被験者の身体サイズをJISの衣料サイズに対応させると、バストは成人衣料サイズにおけるSサイズ、ウエストは成人衣料サイズにおけるMサイズに相当することがわかる。しかし、ヒップは成人衣料サイズにおいて相当サイズが見当たらなかった。このように、着用している既製服のサイズと身体サイズが異なるだけでなく、重症心身障害児の身体サイズはJIS規格の1つのサイズに統一できないことが明らかとなった。

そこで、JISサイズと被験者の身体サイズを表4に比較した。この例では、被験者Bが日常に着用している衣服サイズは、主にMサイズの既製服であった。表中、被験者の身体サイズが成人用サイズに該当する場合は**を、少女用サイズに該当する場合にはそのサイズ範囲に*のマークを付記した。これより、被験者Bは、日常に着用している衣服サイズは身体サイズに不適合であることが明らかである。

表4 既製衣料品サイズ範囲表示

成人女子用衣料サイズ**		S	M	L	LL	3L
基本身体寸法 身長 154~162cm	バスト	72~80**	79~87	86~94	93~101	100~108
	ウエスト	58~64	64~70**	69~77	77~85	85~93
	ヒップ	82~90	87~95	92~100	97~105	102~110
少女用衣料サイズ*		130	140	150	160	170
基本身体寸法	身長	125~135	135~145*	145~155	155~165	165~175
	胸囲	61~67	64~72	70~78*	76~84	82~90
	胴囲	51~57	53~59	56~63	58~66	61~69*
	腰囲	66~74	70~78	76~84*	82~90	88~96

M 調査対象者が主に所有している衣服のサイズ

****** 調査対象者の身体サイズ(成人女子用衣料サイズに対応させる)

***** 調査対象者の身体サイズ(少女用衣料サイズに対応させる)

特に、バストとヒップの部位のような衣服サイズが身体サイズに合わない部位では、必要以上にゆとり量が生じていることが明らかとなった。このことより、おそらく、健常者における衣服のゆとり量の分布状態とはかなり異なっていると推測される。衣服のゆとり量は、温熱的快適性、機能性、美しさに影響する大きな要因であるため、重症心身障害児で示されたような身体サイズに適する衣服サイズがない場合には、健常者が衣服を着用した時とは、異なる衣服を着用しているであろうことが考えられる。このような場合、予想されることは、温熱的な快適性は、健常者よりも寒く不快と感じる方向に位置するであろう。

従って、重症心身障害児の衣生活向上を考える際には、健常者と異なる衣服内気候、衣服内環境であるという認識が必要であろうと思われる。

4. 体表面温度計測

サーモグラフィによる体表面温度計測を、衣服調査と同様の被験者 12 名および健常者 1 名について行った。図 5-5 は健常者 1 名と重症心身障害児 2 名における、足部と顔部の計測結果例である。

計測時の被験者の衣服と環境条件を表 5 に示す。健常者では、顔の平均温度は 34.4℃、足の平均温度は 31.1℃でその差 3.3℃程であったが、重症心身障害児では、被験者 K における顔の平均温度は 35.4℃、足の平均温度は 25.8℃で、その差が 9.6℃もあった。また、被験者 I のように、顔よりも足の方が高温であるケースも見受けられ、手足末梢部皮膚温は健常者とかなり異なるうえ個人差が大きく、自律性の体温調節活動も不十分であると推測される。

表 5 体表面温度計測時の被験者の状態と環境条件

被験者	衣服	姿勢	体温 (°C)	環境温度 (°C)	環境湿度 RH(%)
健常者 Sub. M. (Female)	長袖セータ・ 長ズボン	床に体育す わり	36.4	24.2	56.0
Sub. K (Male)	長袖シャツ・ 長ズボン	車椅子で仰 臥位	36.6	23.0	54.5
Sub. I (Female)	長袖トレーナ ー・長ズボン	床に腹臥位	36.9	24.2	56.0



図5 体表面温度計測結果

表6 健常者と重心障害児との顔部と足部表面温の比較

	顔部平均 温度 (°C)	足部平均 温度 (°C)	顔部と足部 の温度差 (°C)
健常者M (Female)	34.4	31.1	3.3
被験者K (Male)	35.4	25.8	9.6
被験者I (Female)	34.5	34.8	-0.3

5. 総括

本研究の総括を以下に示す。

(1)重症心身障害児の衣生活におけるQOLの向上は、介護者の意識と密接に関わっていることが明らかとなった。本研究において、特に、衣生活に対する関心は、職種により有意差がみられ、介護者の職業によりその衣生活への視点は異なることが明らかとなった。

今後、重症心身障害児にとっての望ましい衣生活、という何らかの指針を示す必要があると思われる。

(2)介護者へのアンケート調査により、重症心身障害児の衣服への要望が抽出できた。機能性だけではなく、快適性は重要視されていることがわかった。衣服材料に望まれていることは、保温性や肌触りが重視され、サイズの不適合が大きな問題点として抽出された。

(3)重症心身障害児の身体サイズは既製服におけるJIS規格の1サイズに統一できないことが明らかとなった。したがって衣服内のゆとり量の分布は当然健常者と異なり、例えば衣服による保温効果などを考える際にも、健常者とは異なる衣服内環境への配慮が必要であると考えられる。

(4)重症心身障害児の手足末梢部の皮膚温は健常者とかなり異なる上、個人差が大きく、自立性の体温調節が不十分であることが観察された。したがって重症心身障害児は健常者以上に、衣服による行動性の体温調節が重要であることがわかった。

6. さいごに

重症児に関する研究は、最近ではかなり進んできたと言えるが、衣服など生活に密着したものに関してはまだまだ少ないように思われる。

本研究は、重症心身障害児(者)のQOLの向上を支援するための衣服研究であり、個人の身体的そして知的機能のレベルに応じ、生活環境や活動レベルをも考慮した着心地のよい衣服情報を提供することを目的としている。自らの意志を言葉として表現することが困難な場合もある重症心身障害児(者)は、快と不快を訴えることが不可能であり、特に常に身体と直接接している衣服により生じる不快感は、精神的・肉体的なストレスとなり、想像を絶するものがある。重症心身障害児(者)のQOLを高めるためには、最初に衣服が起因するストレスを除去することが必要であり、着心地のよい衣服の提供が必要である。

今年度は、重症心身障害児の衣生活の問題点を把握するために、介護者の意識調査を行い、情報を収集した。一方、重心者特有の身体形状が衣服の温熱的な着心地に及ぼす影響について明らかにするために、被験者実験を行い、健常者との違いを明らかにした。

今後、重症心身障害児に望ましい着心地を提供するために、吸湿性・透湿性・通気性・保温性・肌触りの観点から適切な材料や衣服形態について検討し、着用時の衣服内環境の最適化を行う予定であり、より良い衣服の開発を目指した研究を進めていきたいと考えている。

研究要旨：重症児に関する研究は、最近ではかなり進んできたと言えるが、衣服など生活に密着したものに関してはまだまだ少ないように思われる。重症児における衣服が重症児自身に関して、どのような意味を有するのか、あるいは、家族や施設で身近に介護をする人々において、彼らの衣服がいかなる受け止められ方をしているのか、などについてアンケート調査を行い、QOLを向上させるために、重症児の生活における衣服の意味について、情報を収集し検討した。衣服には、機能性はもちろんのこと快適性が望まれており、保温性や肌触りが重視され、サイズの不適合が問題点として抽出された。

1. 始めに

重症心身障害児（以下、重症児と略）に関する研究は、初期における療育内容に関する研究から、その後はもっと幅を広げた研究に変わりつつある。しかし、食事や衣類など身近なテーマに関しては、まだまだ、少ない現状にある。このように衣食住に関する研究は、これまでの施設中心の療育から、在宅中心のものへと変化しつつある現在、極めて重要な課題と考えられる。

我々は、今回、重症児における衣服が重症児自身に関して、どのような意味を有するのか、あるいは、家族や施設で身近に介護をする人々において、彼らの衣服がいかなる受け止められ方をしているのか、などに焦点を絞って研究を進める事にした。もとより、衣服は元来、寒さから身を守ることから発していると思われるが、現在に

おいては、このような生理的機能のみならず、特に女性においては、ファッションなど別な要因の持つ意味が大きいと思われ、このような観点においても、障害児などの療育においてどのように考えられているかと言う問題点も今後検討していかねばならない点であろうと考えたからである。

2. 研究の目的

その為に、まず、どのような意識で衣服が受け止められているかとの視点で、アンケート調査を行った。

アンケート（資料1）は、障害児に関する事項と家庭環境の事について聞き、次に保護者自身の事について聞き、最後に、衣生活について聞いている。

3. 研究対象

「重症児を守る会東京都支部」の協力

により、保護者に上記アンケートを実施した。症例数は、現在までのところ150症例である。男：68例、女：81例、無記入1例である。障害の種類は、重症児が107例と大部分を占め、身体障害児や知的障害児もそれぞれ10数名ずつ見られている。

年齢分布は表のごとくであり、9歳未満は一例のみであり、10歳代が22例、20歳代が36例、30歳代が60例、40歳代が24例、50歳代が5例であった。

表1 生年月日の分布

度数	数	%	有効%	累積%
5-9才	1	0.7	0.7	0.7
10-14	6	4.0	4.1	4.7
15-19	16	10.7	10.8	15.5
20-24	10	6.7	6.8	22.3
25-29	26	17.3	17.6	39.9
30-34	41	27.3	27.7	67.6
35-39	19	12.7	12.8	80.4
40-44	12	8.0	8.1	88.5
45-49	12	8.0	8.1	96.6
50-54	3	2.0	2.0	98.6
55-59	2	1.3	1.4	100.0
合計	148	98.7	100.0	

4. 研究結果

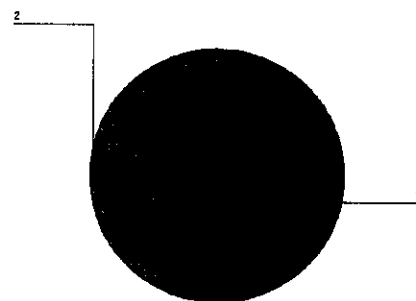
以下、アンケートの各項目に関しての単純集計の結果について述べる。

障害程度を手帳で見ると、肢体不自由1級が97例であり、肢体不自由2級が11例、3級が1例であった。療育手帳

で見ると、愛の手帳1級が18例、2級が31例で、3例であった。このうち、13例はこれらのいずれかを共有している人たちであった。

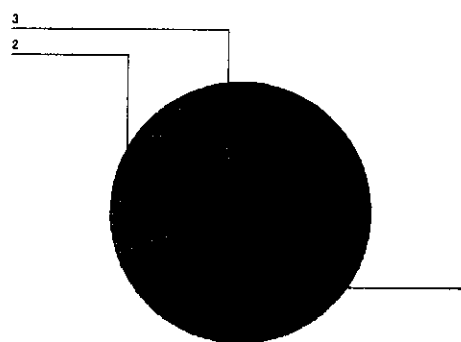
在宅か施設かとの問いには、85例が自宅であり、65例が施設入所であった。

1.4 自宅(1)・施設(2)



施設入所者にのみ聞いた施設の満足度は43例が満足と答えており、大いに不満と言うのはたったの2例であったが、入所者のうち、23例が回答をしていない。

1.5 処遇・満足(1)やや(2)多い(3)



障害の程度は、運動機能と理解程度のみ聞いたが、運動機能では立てるもの37例、座れるもの51例、寝たきり57であった。理解程度は話しかけても殆ど反応しない8例、身体的接触に反応する13例、話しかけに反応する53例、単語の意味を理解する27例、日

常会話を理解する 43例であった。

記入者の続柄は母が111例と最も多く、父が24例とこれに続き、父母両者が5例であった。しかし、兄弟も4例と少数ではあるが見られている。

親の年齢分布では30代が3例、40代が17例、50代が38例、60代が34例、70代が24例、80代が4例であった。

同居家族の人数は、なし6例、1名18例、2名36例、3名34例、4名11例、5名3例、6名3例であった。

衣服についての質問では、まず、機能面と快適さのどちらを重視しているかとの質問に対しては、機能面重視が51例、快適さ重視が60例、両方重視は14例であった。

着替えをどのような時にしますかとの質問では、汚れるたびにが56例、朝起きたときにが51例、外出する時が2例、その他4例であった。

1日平均の着替えの回数は、夏では1回が25例、2回が42例、3回が24例、4回が4例、5回が1例であった。また、冬では1回が67例、2回が34例、3回が7例、4回が1例であった。

衣類の素材についての質問では、吸湿・吸水性重視が71例、保温性重視が101例、通気性重視が84例、強度重視15例、伸縮性重視7例であった。

素材として最も使用しやすいものとはどの質問では、綿124例、毛2例、ポリエステルやナイロンなどの合成繊維8例、その他2例であった。

衣類を選ばれる時に重視する点に関してはサイズ82例、形18例、色29例、

肌触り47例、素材62例、デザイン31例、丈夫さ21例、本人の好み11例であった。

衣服の着脱に際して重視する点に関する質問ではボタン66例、ファスナー44例、マジックテープ15例、ひも5例、その他24例であった。

衣服の大きさに関しても、かなり大きめなもの8例、少し大きめなもの75例、ちょうど良い大きさのもの57例であった。

衣服のサイズでなにを基準に選びますかとの質問では、年齢4例、身長77例、体重21例、胸囲(バスト)29例、腹囲(ウエスト)39例、頭の大きさ1例、手足の長さや太さ21例、その他6例であった。

既成服のサイズが合わないときの対策では、直す45例、探す7例、合っている18例、手作り3例、大き目を買う1例、買わない1例、対策なし3例であった。

サイズ直しのポイントとしては主として長さをが65例、主として太さをが12例、その他が4例であった。

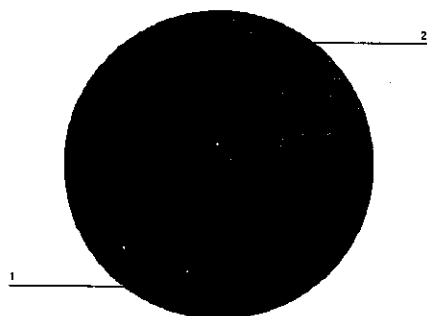
衣類の色を多い色合いから3つを選択させた質問では赤系が70例、青系が82例、黄系が59例、茶系38例、黒系が45例、白系が67例、その他23例であった。

衣服の色を選ぶ時、何を参考にしますかとの質問では、着用者の好み42例、親の好み85例、汚れが目立たない色が28例、その他12例であった。

厚着だと思うか、あるいは薄着だと思うかとの質問では、厚着63例、薄着61例であった。

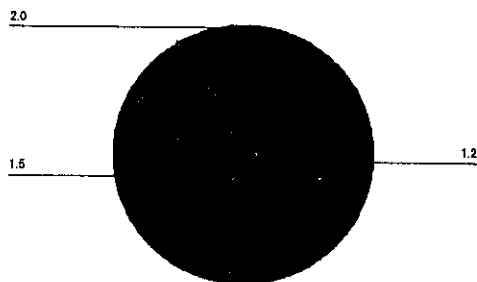
伸びちぢみしたほうが良いか、あるいはしないほうが良いかとの質問では、伸び縮みした方がいいが107例、伸び縮みしない方がいいが28例であった。

1.15伸縮性について ある1無い2



もし、特注で個人の欲求に合うものが出来るとしたならば、既製服に比べてどのくらいの値段ならば購入しますかとの質問では、1.2倍が96例、1.5倍が59例、2倍が0例、それ以上が0例、その他43例であった。

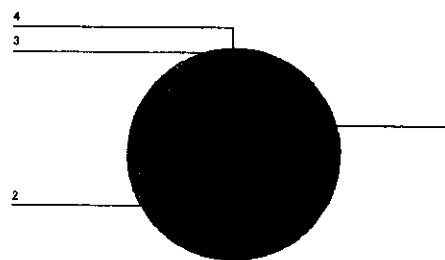
1.16値段の上限



肌触りをどこまで重視しますかとの質問では、非常に重視する57例、多少重視する70例、あまり重視しない10例、ほとんど重視しない1例であった。

1.17肌触りの重視 非常1・多少2

・あまり重視しない3・ほとんど重視しない4



汗の量は多いか、普通か、少ないかとの質問では、多い36例、普通55例、少ない54例であった。

5. 考察

以上、主として重症児を対象に、その保護者に対して上記のようなアンケートを試みた結果、これまで述べたような結果が得られた。対象者依頼先の関係上、重症児が過半数であったがそれ以外の人も含んでいた。しかし、手帳の保有では、圧倒的に肢体不自由手帳が多かったが、これは、重症児の場合、肢体不自由手帳と愛の手帳の両方を取らずに、前者のみの場合も少なくない事を示している。さらに、性別ではやや女性に多く、入所者と在宅者の比率は在宅者がやや多く見られていた。これは依頼した先が、「重症児を守る会」であった事に由来していると思われる。施設入所者のみに聞いた満足度は、約70%が満足であると答えており、大いに不満があると言う方は、たったの2例に過ぎなかったが、入所者のうち、23例が無回答であり、この方々の偽らざる気持ちが知りたいところである。運動機能に関しては、約1/3が立てる機能を有している。コミュニケーション理解では、単語の意味や日常会話を理解して

いるものが約半数見られており、知的機能としてはやや高めの人たちが少くない事が推察できる。記入者は当然の事ながら、母親が圧倒的に多いが、同胞の記入者もたったの4例ではあるが見られている。親の年齢分布では30代が3例、40代が17例、50代が38例、60代が34例、70代が24例、80代が4例であり、50歳代以上にその中心があり、高齢者に傾いている事が伺われる。これは今回の対象者を、「重症児を守る会」においた事による。これは今回の調査とは直接関係ないが、この会の年齢層が高齢者側にかなり傾いており、会の運営上今後の問題を有している事を物語っていると言えよう。同居家族の人数は、なし6例、1名18例、2名36例、3名34例、4名11例、5名3例、6名3例であり、少子化で、孤立家庭が多い現在の状況下で比較的家族が多い傾向にあると言えるかもしれない。

本論文の本題である衣服についての質問では、機能面と快適さのどちらを重視しているかとの質問に対しては、機能面重視が51例、快適さ重視が60例、両方重視は14例であり、両者にあまり偏りは見られなかった。

着替えをどのような時にしますかとの質問では、汚れるたびにが56例、朝起きたときにが51例、外出する時が2例、その他4例であった。やはり、介護にかなりの手をかけなければならないため、汚れたときにいつも代える事はかなりの負担である事が推察される。

着替えの回数は、夏では2回がピークであり、冬では1回がピークとやや夏・

冬での着替えの回数に違いが見られていた。

衣類の素材に関しては、吸湿・吸水性重視が71例、保温性重視が101例、通気性重視が84例、強度重視15例、伸縮性重視7例であり、やはり保温性重視が最も多かった。これは、重症児が感染に極めて弱く、従って、保護者も健康に留意して、常に風邪を引かないように願っている事がここからも伺われた。しかし、強度や伸縮性に関しての数が意外に少なかった。

素材として最も使用しやすいものはどの質問では、綿124例、毛2例、ポリエステルやナイロンなどの合成繊維8例、その他2例であり、日本人においてはやはり、綿の感触と洗濯などにおける有用性がここにあらわれていると考えられた。

衣類を選ぶ時に重視する点ではサイズ82例、形18例、色29例、肌触り47例、素材62例、デザイン31例、丈夫さ21例、本人の好み11例であり、サイズ、素材、肌触りが最も多かった。

衣服の着脱に際して重視する点に関しての質問ではボタン66例、ファスナー44例、マジックテープ15例、ひも5例、その他24例であり、意外に、マジックテープなど簡易なものを選択することが少なかったが、これは、今回の調査の対象者で寝たきりの方が半数以下であった事にもよるのかもしれない。

衣服の大きさに関しては、少し大きめなものを選ぶものが最も多く、あまり格好が悪くならないように考慮しつつ、しかも介助に楽な方法を選択している事が伺われる。

衣服のサイズでなにを基準に選びますかとの質問では、年齢4例、身長77例、体重21例、胸囲(バスト)29例、腹囲(ウエスト)39例、頭の大きさ1例、手足の長さや太さ21例、その他6例とかなりばらついていて、衣服を購入するときに、かなり多くの点に配慮しつつ、当惑している様子が推察される。

既成服のサイズが合わないときの対策では、直す45例、探す7例、合っている18例、手作り3例、大き目を買う1例、買わない1例、対策なし3例であった。ここでは、やはり衣服の選択において圧倒的に、直す必要があることが分かり、これらの対象者での衣服の対策が、まだまだ、不十分であることが考えられる。また、少数ながら手作りとの回答があり、忙しい介助の中での衣服についての苦勞も偲ばれる。今後、もう少し手軽に直すなどの操作が可能な衣服の開発が望まれる。

サイズ直しのポイントとしては主として長さをが65例、主として太さをが12例、その他が4例であり、重症児の特徴として体型が必ずしも健常者と同じではないために、長めの衣服を購入してから直している現状がここでも見られている。

衣類の色を多い色合いから3つを選択させた質問では赤系が70例、青系が82例、黄系が59例、茶系38例、黒系が45例、白系が67例、その他23例であった。配色に関しては、各家庭における保護者の好みの問題とも考えられるが、回答がかなりばらついていた。しかし、強いて言うるとすると、明るい色を好む傾

向にあるとも考えられる。

衣服の色を選ぶ時、何を参考にしますかとの質問では、着用者の好み42例、親の好み85例、汚れが目立たない色が28例、その他12例であり、やはり、表現力の少ない重症児においては親の好みを優先させる傾向が強い事がわかった。

厚着だと思えるか、あるいは薄着だと思えるかとの質問では、厚着63例、薄着61例の回答が得られたが、過保護の傾向があると考えられる重症児で、この両者がほぼ同数であることは興味深い。しかし、ややかんぐって考えれば、薄着であると思いつつ、厚着をさせている保護者もいるのではないかと思われる。

伸びちぢみしたほうが良いか、あるいははしないほうが良いかとの質問では、伸び縮みした方がいいが圧倒的に多数を占めた。

もし、特注で個人の欲求に合うものが出来るとしたならば、既製服に比べてどのくらいの値段ならば購入しますかとの質問では、1.2倍が96例、1.5倍が59例、2倍が0例、それ以上が0例、その他43例であり、保護者は経済的な事を考えて、多くは、1.5倍程度までは許容しているが、逆にいえば、それ以上の負担には「NO」と言っている事がわかった。

肌触りをどこまで重視しますかとの質問では、非常に重視する57例、多少重視する70例、あまり重視しない10例、ほとんど重視しない1例であり、肌触りに関してはかなり重視している事が伺われる。

汗の量はが多いか、普通か、少ないか